2 国家と個人の衝突

▶ pp.185～188

「戦争廃止論」―内村鑑三

余（よ）は日露非開戦論者であるばかりでない，戦争絶対的廃止（はいし）論者である，戦争は人を殺すことである，そうして人を殺すことは大罪悪である，そうして大罪悪を犯して個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。

＊　＊　＊

世には戦争の利益を説く者がある，しかり，余も一時はかかる愚（ぐ）を唱えた者である，しかしながら今に至ってその愚の極（きょく）なりしを表白する，戦争の利益はその害毒を贖（あがな）うに足りない，戦争の利益は強盗の利益である，これは盗みし者の一時の利益であって，（もしこれをしも利益と称（しょう）するを得ば），彼と盗まれし者との永久の不利益である，盗みし者の道徳はこれがために堕落（だらく）し，その結果として彼は終（つい）に彼が剣を抜いて盗み得しものよりも数層倍（すそうばい）のものをもって彼の罪悪を償（つぐな）わざるを得ざるに至る，もし世に大愚（たいぐ）の極と称すべきものがあれば，それは剣をもって国運の進歩を計らんとすることである。

（「戦争廃止論」『デンマルク国の話ほか』
「読んでおきたい日本の名作」教育出版株式会社）